

---

# 戦いと魂のリチュアル

LivaTos

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦いと魂のリチュアル

### 【Nコード】

N2724Z

### 【作者名】

L i v a T o s

### 【あらすじ】

魔物として覚醒した男子高校生・園原脩平が巻き込まれたのは、百八体もの魔物が、最後の一人になるまで殺し合うというバトルロイヤルだった。

生き残った勝者は、四十九もの願いを叶えることができる。

戦い、そして散っていく命。

園原は極限状態の中、生き残ることを決意する。

非情で残酷なランキングバトル、開幕。

## 覚悟

「来ました……」

黒のローブに身を包んだ、少女の呟きが暗い屋内に響き渡った。

それは、やっとこの日が来たという歓喜の気持ちと、これから始まる使命に対する責任と、多くの悲しみを見越した悲嘆などを含んだ声だった。彼女はこの時が来るのを待ち焦がれる一方で、現在までの時間経過を拒絶する思いも持っていたのだ。絶対にこの儀式は成功させなければならぬ、しかしそれに付随するものはひどく惨い<sup>むご</sup>。

少女の心に在るジレンマは、計り知れないほどの大きさだった。

「ようやく、ですね。アリア様」少女と同じ格好をした男が言った。彼は目元まで覆っていたフードを捲る。端正な顔立ちと鋭い眼光が露になり、使命をまっとうするという覚悟の表情を見せた。

アリアと呼ばれた少女はええ、と頷くと、目を瞑り、胸に手を当てた。すると過去の映像が、瞼の裏に映写されていった。

倒れていく兵士、内臓が飛び出た死体、子供を抱きしめて死んでいく母親たち、目玉がくりぬかれた死体、足を引き千切られた幼女、四肢と頭が無くなった死体、目の前の死体、死体、死体、死体、死体死体死体。

あまりにも悲惨な静止画がスライドしていく。知らない内に鼓動が早くなるのを彼女は両手で感じた。どくどくと、どんどんそれは上昇していく。危うく過呼吸になりそうだったが、その時脳裏によぎった彼女の父の姿が、それを抑えた。

「アリア様？」先ほど発言した男が不安そうに訊いた。「どうかやさしかったですか」

「いえ、何でもありません。少し、昔のことを思い出していただけです。大丈夫ですよ。ウィル」

ウィルと呼ばれた男は、顎に手を当てて眉間に皺を寄せた。

「そうですね。しかし顔色が芳しくないようですが……もしかする

と、何かお体に異常があるのかも知れません」

そこまで言ってからウィルは何かに気づいたかのように目を見開くと、両手で顔を覆い、そのまま海老反りになって膠着した。

アリアが怪訝な顔になった時だった。ウィルは反動をつけて素早く前屈みになり、自身の両手を眺める。

「ああ、なんとということ！ アリア様に万が一、万が一にも害が及ぶことがあれば、私は、私は……っ！」

あ、またいつものだ とアリアは思った。同時に少し安心した。ウィルは彼女の父親を崇拜している。そしてその娘であるアリアに対して過剰な愛を抱いており、時折狂信的な行動を取ることがある。それをアリアは知っていた。

「本当に大丈夫ですから」アリアは両手をプラプラと振った。

「ああああ！ 私は、ご尊父に申し訳がたちません！」すっかり自分の世界に浸っているウィルは、アリアを見据える。「失礼ながら、アリア様。そのお体を私めに調べさせてはもらえませんか！ 頭の方から足の先まで御見せになってさえ下されば、必ずや、必ずや私の命にかけてアリア様に仇なす憎き害悪を駆逐してご覧にいきますさあ！ さあさあさあさあ！ 幼き頃と同じように私の前に全て……」

「だ、だから、本当に大」

「しかし！ 自覚していないだけで実は重大な病に」

「キモいんだよ、バカ！」ウィルからみて左側から罵声が飛んだ。

暗闇からウィルと同じ格好をした少年が出てきた。「姉ちゃんがドン引きしてんじゃない！ 少しは考えて喋れ、クズ！」

「シエオン……？」ウィルによるセクハラ攻撃に困惑していたアリアは、現れた少年のほうに向かって言葉を放った。

シエオンと呼ばれた少年は「久しぶりだね」と言いながら、フードを乱暴に捲った。色白の肌、まだあどけなさが残る顔立ちと丸っこい輪郭、濃紺の綺麗な頭髮、紫色の右目と青色の左目、本来なら非常に目立つ身体的特徴だが、暗闇であるこの場ではその存在感が

霞んでいた。明かりは蝋燭に灯された炎しかなかった。

「えっ、なんで？　なんでまだ知らせてないのに、シエオンが？」

「なんでって……、姉ちゃん、『時が来た』ことぐらいボクでもわかるよ。ていうか人間界にいる魔物は全員知ってるんじゃない？

まあ、魔物っていつてもホンモノのほうだけだけど。だから、わざわざ知らせにいかなくていいよ」

「あ、そうなんだ……」

「うん。で、そんなことよりも……おっさん！」

シエオンは右隣にいるウイルを睨んだ。

「なんですか」彼は涼しい顔をして応対した。

「また姉ちゃんに下品なこと言ってただろ！　いい加減、そついうのやめろ！　姉ちゃんだってなあ、もう年頃のオンナなんだよつ、もうあんたの保護対象じゃないんだつ、いちいち気持ち悪いこと言うなつ」シエオンはビシツと自身より遥かに大きい男を指差した。

「年頃のオンナって……シエオン……どこでそんな言葉を……」アリアは少し呆れた。

「なにを言っているんです？　あなたは」ウイルはシエオンを見下しながら反論を開始する。「アリア様はまだまだ子供です。なぜなら、未だにクマのぬいぐるみを抱いたままでないと思われませんし、私がお側に仕えていないと何もできないからです」

「ち、ちよつと！」アリアは思わぬ暴露に焦った。

「さらに」ウイルは人差し指をあげた。「アリア様の麗しい臀部には未だに蒙古斑があるので！」

「なんで知っているの！　そんなこと！」アリアの顔が見る見るうちに赤くなっていった。確認するように自分の尻を触る。

「どうです？　それでもまだ子供ではない、と言い切れますか？

アリア様を姉と慕っているくせに全く血縁関係の無いシエオンくん」「そ、そんなの関係ないだろつ」一際大きい声で言ったシエオンは一呼吸置いてから続けた。「大体、ぬいぐるみを抱いてるとか、そんなの別に大人とか子供とか関係ないじゃん！　だからつまり、姉

「ちゃんは大人なんだよ！ 大人っ！ 絶対にもう子供じゃないねっ」  
「どういう理屈なの……？」アリアは肩を落とした。もつとマシな  
言い分はなかったのか、と思った。

「そ、それにつ、あんたが側にいないと何もできないとか言ってた  
けど、それはただ単にあんたが過保護なだけなんじゃないの！ 姉  
ちゃんだつてさ、あんたがいなくても充分やっていけるとボクは思  
うんだけど！」

アリアはシエオンの言葉に二回深く頷いた。これには概ね同意だ  
った。

「ちなみに」シエオンは肩で息をしながら、落ち着きを取り戻すよ  
うに言った。「姉ちゃんのケツに蒙古斑があるのはボクも知ってた  
から」

「だからなんで知っているの！」彼女は両手で自分の尻を押さえた。  
その時、ウィルはやれやれといった感じで肩をすくめると口を開  
く。

「あなた、何も分かってませんね」

「何だと！」シエオンが食って掛かる。

「もう、ちよつと二人とも」様子を見かねたアリアが宥めるように  
言った。「そんなことで言い争っている場合じゃないでしょ」

「でも姉ちゃん」シエオンは視線をアリアに移した。「こいつが鬱  
陶しいのは姉ちゃんも同じでしょ？ 今言っておかないで、いつ言  
うんだよ！」再びウィルを睨む。

「シエオンっ！」アリアの鋭い声が飛んだ。シエオンはビクツと一  
回身震いすると、説教を恐れる子供のような怯えた顔でアリアの方  
を見た。アリアは、我が子を叱る母親のような厳しい顔で言葉を紡  
ぐ。「これから私たちにとつて、すごく大切な、ううん、大切な  
言葉じゃ足りないくらいのが起こるんだよ。悲しくて辛くて、  
目を背けてしまいそうな、でも絶対見届けなければならぬ。そん  
な嫌なことが始まるんだよ。分かってる？」

「……それは」シエオンは俯いて答えた。「うん、分かってる……」

「じゃあ今、ウィルと言い争っている場合じゃないということくらい分かるよね。これからみんな一枚岩になって頑張らないといけないんだから、仲間同士で喧嘩してちゃダメだよ」

「……うん、ごめんなさい……」

シエオンが少しだけ頭を下げるのを確認したあと、アリアは「ウィル！」と呼びかけた。

「はっ、申し訳ございません。私としたことが少々冷静さを欠いた発言をしてしまいました」ウィルは肩ひざをついた。

「あなたの働きには期待しています。特に今回のような複雑であまり前例のない事柄では、私よりも博識なあなたのほうが動きやすいでしょう。先の戦いではあなたの指揮のおかげで、少数ですが重要な方々が生き残れました。シエオンも……あの戦いは思い出したくないほど凄惨なものでしたが」

「勿体無きお言葉」

「しかし、先ほどのように簡単に平静を崩すようでは今回の儀式、おそらく失敗に終わるでしょう。それほどあなたは重要な役割を担うのです」アリアは多くの酸素を吸い込み、強調するように言った。「全てはあなた次第だということをお忘れなきように。それと何故蒙古斑のことを知っていたか、あとでたっぷりと聞かせてもらいます」

はっ、とウィルは勢いよく返事をした。

そして少しの間のと、彼は口を開いた。

「ですが、全てが私次第というのは過言でございます」

「そんなことはありませんよ」アリアは言った。「私は『審判』をすすめる予定ですが、その時はそれを統括するあなたのほうが地位は上ですし、私の出番は一番最後ですから、ほとんどの時間で儀式に関わりません。実質あなたが進行することになるはずですよ。私は、良いところ取りというわけです」彼女はぎこちない笑みを浮かべた。

「それは……仰る通りですが」

「自信がないのですか」

「自信ねーのかよ」シエオンが横から言った。

「うん、シエオンは少し黙ってて」

「いえ、そういうことでは……」ウィルはゆっくりと答える。「ただ、やはりアリア様が『審判』をなさるのは危険かと思ひまして」  
「そういうことか、とアリアは納得した。確かに魔物同士の戦いに立ち会う『審判』は、様々な規定で守られていたとしても危険かもしれない。だがアリアはこれから起こることを始終見届けたい、目を背けたくない、と思っていた。

「要らぬ心配ですよ。ウィル。私は望んで『審判』をするのです。全て覚悟の上です。それに私だけがのうのと傍観しているわけにはいきません。そのようなことは私の誇りが許さないので」

「では、迷いは生じないと約束してもらえますか。今は亡きご尊父の願いを成就させると誓って頂けますか」

「えっ？」

ウィルは真っ直ぐアリアを見据えていた。シエオンもキョトンとした目でアリアを見ていた。

その時アリアは、ウィルが言ったことの真の意味を理解した。『危険』とは肉体的なことだけではなく、精神的な意味合いも内包していたのだ。

アリアは戸惑った。その約束をするには彼女はあまりにも優し過ぎた。

だが、彼女は一瞬だけ心を鬼にする。既に芽生え始めている迷いをウィルに見透かされないようにするためであった。現在、魔物の頂点に位置する彼女が悩むことは、立場上憚られることであり、またその資格はないと彼女自身も思っていた。

ただ只管、御父様の言うとおりに動けばいい。  
アリアはウィルを見つめ、宣言するように言う。

「大丈夫です。私は迷いません。百八体の魔物が殺し合い、いかに無惨に命が消えて行こうとも、私は、絶対に……！それが御父様の願いであり、私自身の願いです……！」

こうして悲劇の幕は上がった。

百八人の人間は魔物として覚醒し、四十九の願いを叶えるため最後の一体になるまで戦い続ける。

希望と絶望と欲望が混ざり合う泥沼の戦いが、始まるのだ。

「ザギラゲギヨゲホグイギジ ラザクド ザギラゲギヨゲホグイギジ ラザクド ザギラゲギヨゲホグイギジ ラザクド……」

「うるさーっ！」

そのはらしまへい

園原脩平は目を瞑った状態のまま不気味な言語を発する目覚まし時計を掴み、壁に投げつけた。目覚まし時計は地面に落ち、単一の電池一個を吐き出す。不快な音が途絶え、時計にくつついていたグロテスクなデザインの人形の首が取れて、コロコロと床を転がった。「もう起きてるし……」園原は呟き、寝返りをうつと、再び眠りの世界に戻っていった。

あと数分 その単語を何度も頭の中で繰り返しながら、彼は体がふわふわと浮かんでいるような快感に身を委ねた。段々と睡眠の織り成す麻薬のような効果に嵌っていく。そして彼は、家を出て学校に向かうという夢を見た。

ああ、いつの間にか起きたのか、もう学校が目の前に。

ところが真っ白な校舎は曇気楼のようにぼやけて、消え去った。

そこでようやく園原は、これが夢であることに気づく。

そして強烈な脱力感と疲労感と共に、園原の意識は覚醒した。

現実に戻ってきた、と彼は思った。現在位置はベッドの上で、仰向けに寝転がっている。当然、起床も登校もしていなかった。分かっていたことだが、少し落胆した。

「おはよう」

突如として震えた声が聞こえた。空気の振動を最小限に抑えたような音だった。『幽霊』という二文字が園原の頭に浮かんだ。

彼は飛び起きた。

すると部屋の出入りに使うドアがほんの少しだけ開いていて、その隙間から何者かの片目がこちらを覗いている。

園原は上昇した鼓動を落ち着かせながら、安堵した。

「なんだ、姉さんか……」彼は後頭部を掻きながら呟く。

「フフ……おはよう、脩くん」

「おはよう、姉さん。てか毎回言ってるんだけどさ、そういう登場の仕方、やめてくんない」

園原の姉は依然として片方の目を覗かせたまま、園原を見ている。

「でも……これが私のアイデンティティだから……」

「何言ってるの？ カタカナ使えば誤魔化せれるとでも思ってるの？」園原は眉間に皺を寄せる。

「いや……ただ、ア、アイデンテュティ……が」

「アイデンテュティって何だよ、もろに噛んでんじゃねーか、必要ないのもう一回言おうとして、駄目になってんじやないよ」

「プププ……ブフツ、ハハハ、ぶふふつ、アイデンテュティ、ぶふつ、ア、アイデンテュティって何だよ！」

「自分で言って、自分のツボに嵌まってるし」

「はあ、と園原は溜め息をつく。

この人はいつもそうだ。黙って顔を見せていれば最高級の美人なのに、異常に長い前髪のせいで、整った顔立ちはいつも隠れている。そのおかげで不気味な印象しか他者に与えない。おまけに性格もほの暗く、引っ込み思案で、泣き虫である。

勿論、幼少期から友達はいない。当人は、いると言い張ってはいるが、彼女のことを『貞子』と呼ぶ人間が友達なわけがない。心底彼女の将来が心配だ。こんなことでは結婚もできないだろう。

園原は再び溜め息をついた。

「ブフフフ……あ、そうだ。ご飯できてるよ」

笑いを抑えた姉が言った。

「うん、分かった。すぐ行く」

園原は答えて、ベッドから抜け出した。勢いよくカーテンを開くと、眩い光が入ってくる。陽光に照らされた部屋の中には、悪趣味なデザインのフィギュアが多数置かれていた。

客観的に見たら園原脩平も、姉のことを見下せないほどの気味の悪い趣味を持っていた。

彼は部屋を出て、階段を降り、リビングへ行く。

「あら、おはよう」

ふざけた挨拶をしてきたのは園原の母親である。年齢のわりに皺の少ない肌、昔から変わらない体つき、それらは若作りに余念がないことを如実に表していた。

「おはよう、母さん、朝っぱらからふざけた挨拶するな」

「ノリが悪いわね」

眠たいのにそんなノリについていけるか、と園原は思いながら椅子に座った。目の前には和と洋の混ざった朝食が置かれていた。

箸を使ってご飯を食していると、テレビから変なニュースが聞こえてきた。それは、未確認生物が人間を襲うという内容だった。園原は反射的にテレビの方を見る。清楚な外見の女子アナウンサーが原稿を読んでいた。

園原は食い入るようにそのニュースを聞いた。どうやら、紫色の得体の知れない生物が女子高生を襲ったらしい。襲われた女子高生は行方不明で捜索中のようなのだ。情報提供を促すテロップが流れた。

園原は女子高生を哀れみながらも、ワクワクしていた。しかも事件が起こったのはこの近辺なので、できればその生物を一目見てみ

たいと思った。

紫色の未確認生物か、と彼は成り形を想像し、笑みを浮かべる。突然キーンと耳鳴りがした。そのあと、微かな頭痛が発生した。彼は額に手を当てた。

「痛っ！ 痛う……！」

しかし、すぐ治まった。

「大丈夫？」隣に座っている姉が心配そうな顔で訊いて来た。

「うん、大丈夫、ちょっと頭痛がしただけ」

「テスト勉強のしすぎじゃないのー」母親がおどけながら歩み寄ってきた。

「そうかもしない」

「薬飲んどく？」

「いや、いいや」めんどくさいと園原は思った。

テスト週間は来週から始まるが彼はまるで勉強をしていなかった。だから、頭痛の原因は勉強ではない。

食事を終えた園原は、何故頭痛がしたんだろうと考えながら学校に行くための支度をした。だがあまり気にすることでもないので疑問はすぐに消えた。

顔を洗い制服に着替えた彼は、カバンの中に、あるDVDを忍び込ませた。友人に貸すためだ。頼まれてはいないが。

玄関に行き、そばにある鏡を見た。写った顔は端整とはいえないが、まあまあ整った顔立ちだ。しかし寝癖で無造作になっている髪型が、彼の風貌を台無しにしていた。だが、もともと身だしなみに拘りはないので、あまり気にしてはいなかった。

まあこんなもんだろう、と園原がぼんやりと鏡を眺めていた時、突然、鏡に写っている自分の顔が黒い何かに変わった。一瞬でそれは消え、目を見開いて驚愕している自分の顔に戻った。

「今のは……？」

はつきりと見えた。あれは『顔』だった。黒色でエイリアンのような『顔』だ。眼光だけが紫色に光って、こちらを見ていた。

園原は探るように鏡に触れた。しかし細工は全く見つからない。

「何だっただんだ？」

彼は呟きながら考えたがまるで意味が分からなかった。

「脩くん？」

視界の外からの声に園原は吃驚したが、姉のものであることに気づき、落ち着きを取り戻した。

「姉さん、じゃあ行ってきます」彼は姉の姿を一瞥するとその場から逃げ出すように、慌てて玄関を飛び出した。

「あ、行ってらっしゃい」

彼女の言葉を背中で受けて、園原は道路を小走りで進んだ。あの『顔』に得体の知れない恐怖を感じていた。

## 開戦

走っている最中もさっきの奇妙な『顔』について考えていたが、全く答えはでなかった。

人間は恐怖を感じると同時に好奇心も生まれるらしい、と園原は改めて思った。

家の姿が見えないところまで来ると、彼は足を止めた。後ろを振り返り、家がある方向を眺めた。

あれは、気のせいか。

結局、一番つまらなくて、無難な回答を彼は選んでいた。そして学校の方に向き直り、ゆっくりと歩き始めた。

季節はもう冬で、今日はまた一段と冷え込んでいる。園原はマフラーを巻きなおして、白い息をはいた。両脇を民家に挟まれた一方通行の狭い道は、人の通りが少なく、やがて、歩いているのは園原だけになった。

間もなく、十字路に差し掛かる。彼は、視界の左端にメガネをかけた長身の男を捕らえた。

「脩平おはよー」男はポケットに手をつ突っ込んだまま、挨拶をしてきた。

「ああ、杉下、おはよう」

園原はこの男を知っていた。同じクラスの人間で、親しい友人だ。「寒いなー」杉下は歩きながら呟いた。

「本当だな」と園原は同調しながら、ファスナーを開けて自身のカバンの中を探る。

「何やってんの？」

杉下は訝しげな表情を浮かべる。それを横目に園原は、カバンからDVDを取り出した。

「そ、それは……まさか……」杉下が不安げに言う。

「そのまさかさ！俺が前から面白いつて言った、特撮ドラマ

の最高傑作！ 『怪人デストロイ』のDVD！ 第一巻！」ズバーンと園原は見せ付けた。「貸してやるよ。特別に」

「あ、いや、いいです」

「なんでえっ？」ガクツと園原はこけそうになる。

「いやだつてさ、このデザイン気持ち悪いもん、何だっけ、コウロギをモチーフにしてるんだっけ？ まあ何にせよ、カッコよく作ってもらえればそれでいいんだけどさ、何これ。かなり、気持ち悪いよ。完全に悪役っぽいし、すぐやられそうな奴だし」

「それは食わず嫌いってもんだぞ。いいから騙されたと思ってってみるよ。人間の心を持ってしまったデストロイの苦悩と葛藤が複雑で、深いはなしだからさ」

「深い、じゃなくて不快だろ？」

「誰がうまいこと言えと」そう言つて園原はDVDのパッケージに目をやった。怪人デストロイがポーズを決めている画が瞳に写る。その瞬間、彼は何だかおかしい感覚に陥った。懐かしいような、怖いような、とにかく言葉にできない感覚だった。

「どうかしたか」杉下が訊いた。

「いや……何でも」ない、と言おうとして彼は気づいた。「そうだ、あのときの『顔』、あれに似てる、だけど……少し、違う……？」

「は？ お前何言つてんの？」

あの時鏡に写ったのは、怪人デストロイの『顔』だったのか。だが、それにしても違和感がある。園原はDVDの表紙を凝視した。酷似はしているが、あの『顔』とは少し異なる顔立ちだ。それに、何故鏡に写ったのかが謎だ。そしてさっきの感覚は……？

その時、ゴゴゴ、と何かが道路を擦る音が聞こえた。音のなっているところに視線を移すと、マンホールが実際の位置から数センチだけ浮かび、摩擦音を奏でながら横にスライド移動していた。やがて、人一人が通れそうな隙間ができた。

園原はそれを見て、多少驚愕したものの、下水道で働いていた人が上がってくるんだらうなとぼんやりと思った。しかし、穴から上

がってきたのは、セーラー服を着た女だった。そのセーラー服は見かけたことのないものだった。

「えっ！ ちょっ、えっ！」園原は目の前の状況が信じられない。完全に思考が追いついていなかった。

そんな彼を無視して、謎の女子高生は穴から全身を出した。そして、道路に足をつけると、ご丁寧にマンホールを開口部にはめなおそうとしている。一連の流れが、さも当然かのように動いていた。

「ちょっ！ す、杉下、どうなんだ、これ？」

園原は啞然としながら、杉下を見た。しかし杉下は、園原の問いかけにも応じずに、俯いて目を瞑っていた。

「す、杉下？」園原は怪訝な表情をしながら、杉下の顔を覗き込んだ。「ど、どうした？ 具合でも」

瞬間、杉下は勢いよく開眼し、「何かしら？」と言って微笑んだ。

「杉下、なんで女言葉？ まあいいや、それよりもマンホールが」

園原は女子高生のほうに向き直ろうとした。その時、予想外のことが起こった。頭痛が発生したのだ。今度は前回よりも痛みの度合いが段違いで大きかった。

「痛っ！ またかよ……！」

握力も弱くなり、D V D が地面に落ちた。彼は頭を抱え、歯を食いしばり、痛みに耐える。

杉下が地面のD V D を踏みつけて、女子高生のほうに近づいていた。そして、「いつまで逃げ続けるのかしら？」と口を開いた。

「またもや女言葉だ。」

「杉下……いつからお前、オネエ系になったんだよ……それとD V D ……」園原は苦痛に耐えながら言った。

謎の女子高生は立ち上がり、杉下を見据えていた。それでようやく園原は、女子高生の顔を確認することができた。大きくくりつとした瞳に小さな鼻、乾いた唇。間違いなく美少女の類に入るであろう器量だった。

彼女は数回口をパクパクと動かしたあと、呟くように開口した。

「そ、そそれが、あなたの、『特性』？」おどおどしている。

「そうよ、これが私の『特性』。説明は……見ればわかるから、しなくてもいいわね」杉下は低い声で言った。

依然として痛みを耐え続けている園原は、二人の会話を聞いていたが、まるで理解できなかった。杉下が突然、オネエになった理由も。

「ここは人がいないわね。坊やが一人いるけど、なんか苦しんでるし、どう？ やる？」杉下は園原を一瞥する。坊や、とは園原のことだろう。「まあ、この姿じゃやれないけど、あなたがその気ならすぐに駆けつけるわよ」

「え、遠慮しとく。ここじゃ戦いたくない……」女子高校生は相変わらず、落ち着きのない言動をしていた。

「そう、なら仕方ないわね」杉下は回れ右をして、頭痛に苦しむ園原と向き合った。そして意地悪そうな笑みを浮かべる。「なんて言うと思った？ 逃がさないわよー、あなたは私に殺される運命なんだから」

「お前、何言つて……んだ」園原は搾り出すように声を出した。

次の瞬間、杉下は、アスファルトに崩れ落ちた。と同時に、園原の頭痛は消え去った。彼は「杉下！」と呼びかけながら、倒れた友人を仰向けにする。

「杉下！ 杉下！ 大丈夫か？ てか、なんでオネエ化したんだよ！ なんて倒れたんだよ！ おい！ 杉下！」

頬を叩いて意識を確認するが、全く反応がない。園原は鼓動の上昇を感じ、焦っていた。気温は低いはずなのに、嫌な汗がたらたら流れていく。

園原の横を謎の女子高生が通過した。園原はそれを見逃さなかった。「ちよつと待てよ！」と声をかける。

「何なんだよ！ 何が起こってるんだ？ 何で杉下はオネエ系になったんだ？ 何で意識不明になってんだ？ あんた何か知ってたんだ

る？」

女子高生は逡巡しながら、一言呟いた。

「忘れたほうがいいよ」

彼女は園原に背を向け、学校とは正反対の方向に走り去っていった。「待て、待ってくれ！」という園原の言葉は無視された。

「何なんだよ……」

追いかけたかったが、意識不明の杉下を見捨てて行くことはできなかった。しかし、意外にもその直後、杉下は意識を回復した。

園原は「杉下！」と繰り返し呼びかける。すると、杉下は「うるせえ」と言いながら目を覚ました。

「オネエ系じゃない……」と園原は安堵した。そして、冷静に思考を働かせる。

何が何だかまるで分からないが、杉下は自分の意思で女言葉を使ったわけではないのかもしれない、と彼は直感的に察した。会話の内容も彼自身で言ったにしては、意味不明だ。

もしかしたら、あの女子高生と不思議なつながりがあったて、二人で何やらキャラ設定を作り、それを演じながら話していたのかもしれないが、だとすると杉下が急に倒れるというのが分からない。いや、全て杉下の自作自演で何もかもが仕組まれていたのかもしれない。

そこまで考えて二つの疑問点が浮かんだ。仮に自作自演だとしたらその目的は何なのか？ 重さ五十kg以上あるマンホールをあんな華奢な女子高生が動かせるのか？

「なあ杉下、あれって俺に対するドッキリなわけ？ 結構びっくりしたんだけど」園原は訊いた。

「は？ お前何言ってるんだ？ ドッキリ？ 何の話？」

「いやだって、いきなりあんな口調であんな会話されたら驚くよ。誰でも」

「あんな口調？ 何が？ え、お前の言ってること全然わかんないんだけど」

自作自演ではないのか 園原はマンホールに近づいた。マンホールは、穴にすっかりとはまっていなかった。開口部に大きな隙間が開いたままだ。彼はマンホールに触れて、少し力を入れてみた。びくともしなかった。園原はマンホールが本物であると確信した。となると、女子高生は、穴から出てくるときはマンホールを動かせていて、はめるときは動かせていない。

また謎が増えたが、一つ減った。さっきの状況は茶番でも何でもない。本当のことだ。

そして恐らく、園原の抱えている大部分の疑問の答えは、あの女子高生が知っているだろう。

そう思うとしても経ってもいられなくなった。このまま謎を迷宮入りにさせてしまうのは、絶対に駄目だ、何か気持ち悪い、後悔する、と思った。

「すまん、杉下」と言い残して、園原は女子高生のあとを追うように走り始めた。「おいどこいくんだよ」と杉下が後ろで言っていたが、何も返事を返さなかった。

白い息をはきながら走る。冷気が頬を切り裂くように通り過ぎていく。もう女子高生の後姿は見失っていたが、それでも走り続けた。あの女子高生に近づいたらまた頭痛が起るかもしれない、と園原は思っていた。痛みが来たら、それが強くなる方向に進めば、会えるはずだ。確証はないが。

休まず足を送り出していると、いつの間にか大通りの歩道に出ている。街路樹の向こうで自動車が行きかっている。園原は女子高生の姿を探しながら移動していた。

突然、目の前に女性が現れた。園原は避けきれず、派手に衝突してしまった。前方不注意が原因である。

「す、すみません。大丈夫ですか」彼は慌てて謝罪した。

「ええ、大丈夫よ。あなたこそ大丈夫？」女性は微笑みながら言った。

「ああ、はい、大丈夫です」園原は答えた。

女性は金髪で挑発的な顔をしていた。大きな胸が特徴的だ。すると、園原の頭はズキズキと痛み始めた。

来た、と彼は思った。あの女子高生が近くにいる。

「本当に大丈夫？ 何だか苦しそうだけど」女性が訊いて来た。

「大丈夫です」と園原は答えてその場を離れようとしたが、意識が消えていきそうになり、おぼつかない足取りになった。

何だ、これ。

「やっぱり大丈夫じゃなさそうよ」

女性が笑みを浮かべながら、言った。

その瞬間、園原の意識は眠りに付くように暗闇の中に落ちていった。

目が覚めると彼は、誰もいない教室にいた。窓際の列の後ろから二番目の席に座って、机に伏せている。即座に姿勢を正して、前方を見据える。黒板に数式がかかれてあったが、途中で途切れていた。しかも、周りをみるとちらほらと椅子が倒れていて、何かが起きたことを示唆していた。

なんで、と園原は思った。さっきまで学校とは正反対のところになっていたのに。確か、女性とぶつかってそれから意識を失って……。

「瞬間移動でもしたのか……？ 俺」恐怖が体中を巡っていくのを彼は感じた。「みんな、みんなはどこにいったんだ？」

園原は窓から外を眺めた。校庭では全校生徒が綺麗に列を成して並んでいた。教師たちは、点呼をとるために動いている。

「はは、なんだ、いるじゃん」

安心した園原はすぐに外に出ようと決めた。色々考えるのは校庭に出てからでいい。彼は早く身の安全を確保したかった。

しかし、教室の出入り口に誰かが立っていた。金髪で挑発的な顔をした、豊かな胸が特徴の女性だった。

園原は、あ、と声を漏らしていた。意識を失う前にぶつかった女

性だ。

彼女は悠然と園原との距離を縮める。園原は警戒しながら後退した。女性は彼との間を二メートルほどに近づけたあと、「始めるわよ」と言った。

「何、言つて」園原は当惑する。

突如として、教壇に何者かが現れた。黒のローブを身にまとっている人間だ。性別は分からない。その人間が右手を挙げて、こう言った。

「立会います」

女の声だった。

たちまち彼女の挙げた右手から透明な球体が現れて、宙に浮かび一瞬で大きくなっていった。球体は膨張を続け、学校を覆うほどの大きさになった。だが、肥大化は止まらず、校庭を越えて近隣の住宅を巻き込むまでの成長を遂げた。

園原は咄嗟に両手で身を守っていたが、球体の内側に入っても身体になんの異常もないことに気づくと、ゆっくりと腕を下ろした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2724z/>

---

戦いと魂のリチュアル

2011年12月11日07時48分発行